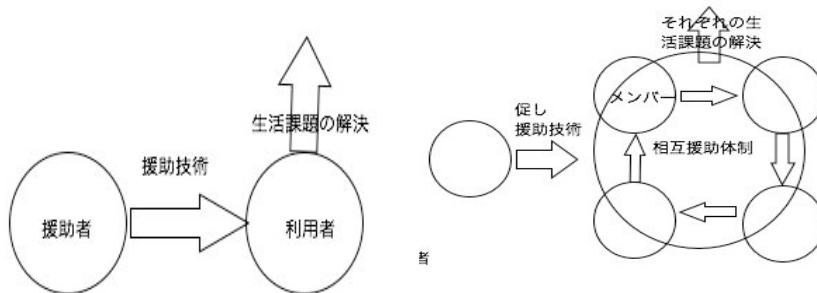


グループとは何か

ケースワークとグループワークの違い



グループワークはケースワーク（個別援助技術）と同じように、直接援助技術である。なので、個別援助技術は援助者が利用者に個別に働きかけるスキルや枠組みであるのと同様に、集団援助技術は集団の力を利用して利用者に働きかけるという事です。

誤解されやすいが、グループワークといえば、メンバー自身が行う活動に焦点がいて、援助者の役割はどこにあるのかが分からないと言われる。しかし、援助者の役割は明確で、集団の力をうまく引き出して、促す事にある。言い換えると、援助者が同じような悩みとか課題を持った人たちの間に相互作用を促し、悩みを共有し、励まし合ったりするように誘導してあげるというテクニックを駆使することである。メンバーが互いに共通の心配事や問題を共通することが出来るのは、SWGの持つユニークな側面である。通常治療グループにやってくる人々は、問題を抱えているのは自分一人であり、自分と同じ問題に直面している人は他にいないと思こんでいる。SWGは、共通の心配事や問題を共有すること（普遍性）を得ることで、メンバーに対して、問題や心配事を抱えているのは自分一人ではないことを示すことが出来る。

ちなみに援助技術には二つの意味があって、一つがいわゆる基本的な面接技術(傾聴の仕方、うなずき、閉じた質問開かれた質問の仕方)や援助者として振る舞うべき基本原理、例えばバイスティックの7原則などである。これは、グループワークだろうがケースワークだろうが基本的には共通して使われるものである。とはいえ、グループワーク特有の方法もある。例えば、資料にあるラウンドロビンやメイポールなどである。もう一つが、援助者がよって立つ理論モデルによって利用者の生活課題の解決方法が違うものになる。エンパワメント・ストレングス、最近ではナラティブが流行の兆しがありますし、クリティカル(急進的) ソーシャルワークとかラディカル(革新)、ソーシャルアクションなどである。いずれにしろ、そのモデルが利用者の何を解決あるいは軽減するのかは思想が違うため、同じ事案でも違ったプロセスと結果をもたらします。グループワークでも生態学的アプローチと治療アプローチでは違った結果をもたらします。

いずれにしろ、ケースワークは一對一のコミュニケーションを扱い、援助者が色々場をコントロールしたり、会話を引き出していくのが援助技術であるなら、グループワークは、グループの活動を円滑にしていくように、場をコントロールしたり、どうしたらうまく利用者間の相互作用がはかれるのかを主眼にしたのが援助技術という。

演習：ところで皆さんは今、私に注目していますが、相互作用はあまりなく一方通行である。ひよっとした隣の名前すら分からないかと思う。この相互作用をちょっと体感するために、まず、隣の人、隣がいない場合は、横に3人で、顔を合わせてみてほしい。そして、「名乗って」、よろしくお願ひします。と言ってみてほしい。（やってもらう）それだけで、一對一のコミュニケーションが成立する。
次に、奇数の列の人は、後ろを向いて、同じように挨拶をしてもらうが、資料の後ろにある、ラウンドロビンの形式に沿って、挨拶をしてほしい。このラウンドロビンというのは、グループワークの開始期ではよく使われる方法である。これは、コミュニケーションのチャンネルを開く方法としてオーソドックスな形である。通常は、援助者が会を促すために、まず自身が口火を切って、他のメンバーにも話しやすくする方式である。（自己紹介+出身県も付加させる）

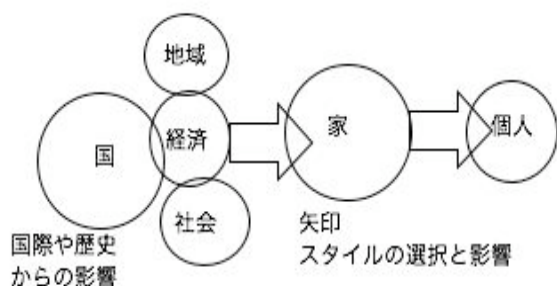
おそらく一対一での挨拶よりも、小グループでの自己紹介の方が当たり前かもしれませんが、広がるような感覚になるのではないか。いまは簡単な相互作用についてやってもらったが、その後、例えば、そのグループでの共有されるべき課題とかを話し合ったりしながらグループが発達していき、トータルとしてその人の生活課題などを克服ないしは、軽減していこうというのがグループワークといえる。ちなみにディサービスなどで風船送りゲームなどが行われやすい。風船を落とさないように次の人に回すというゲームだが、これなども参加者同士との交流をゲームという形で関係性を持たせると言う意味では、有効な手段である。しかし、グループワークは繰り返すように、その後どうするのか。参加者がその後どう実りある活動を行っていくのかが大切である。後で述べる援助過程を意識した取り組みをふまえるとしっかりとしたグループワークになりうる。

つまり援助者は教科書ⅠのP.178にある①の相互援助体制を気づくとか、③の援助体制と気づくためには、援助者はどのようにグループが発達するのかを意識したり、④のどのように促進したらよいのかというリーダーシップとか役割を把握が大切であるということが述べられる。このことについては、後ほどあるいは、展開過程の中で詳しくお話していきます。

とりあえず、押さえておいてほしいのは、2点、**直接援助技術の一技法である事。グループという力～利用者間の相互援助体制を利用したものであることである。**

その意味で、まずもって、改めてグループとは何かについて学ぶ必要があります。というのは、グループの力は個人にどのように影響を与えているのか。そして、グループの中で人はどう発達していくのかを知る必要がある。

日本に生まれた事、家族・地域などの自然発生的な関係



この図では、国のイデオロギーなどから影響を受けている事を表している。しかし、この国とか地域とかに対するアプローチは様々あり、経済学を中心に学んだ人は集団の中に経済効果などを焦点化する。では、社会福祉にとっての集団とは何か。これは後で述べるが、社会福祉の対象が主に普通の生活が厳しくなっている人たちである。そのためどうした生活が困難になるのかという現代の社会システムへの問題提起にある。

そのためには、まず集団一般について簡単に述べる事。そして社会福祉として現代をどう見るかということを考えていきたい。キーワードは規範となる。

私たちは今生を受けてこの場所にいます。誰もがふと思う事だが、もし自分がお金持ちの家に生まれたらとか、厳しくない親の元で生まれたかったとか、〇〇さんのお兄さんになりたかったとかあるかと思う。しかし、生を受けた家族は残念ながら選べない。そして当然我々は、どんな形態（優しい家族、厳しい家族など）であれ影響を受けて成長します。しかし、家族は様々なものから影響を受けています。家族構成している職業によって、子育てや経済観念が違ってきます。学歴偏重になるのか、あるいはのびのびと育てるのかなどです。そうした生活のスタイルは、社会や歴史あるいは地域によって違います。つまり、すでに育ててくれる親は、社会の規範や歴史の影響を受けていますし、先祖のしきたりがあるなら特殊なルールが体に染みついていると言えます。その一方で、様々な社会の中にある価値観を家族成員それぞれ（自分も含め）は、何かを取り上げて、何かを捨てながら生活スタイルを選択しています。このように考えると、確かに自分は選択の余地がなく生まれてきたとい

う意味で、自然発生的な集団の中で生活していますが、よく考えれば、自分の身の回りの集団は、様々な歴史性やイデオロギーによって影響を受けているといえます。

とはいえ、普段はそうした事を意識することなく生活をします。ここに日常における自明性あるいは先行する歴史性が、様々な価値観などを覆い隠す被覆力が働いている。

現在の日本と昔の日本をイメージしてみればすぐに分かりますが、第二次世界大戦時代の日本と戦後そして高度成長期から低成長時代、そして現在の日本が採用しているイデオロギーや価値観は全く違います。確かに、地域差や知識のレベル、家柄、親の思想によってそのイデオロギーをどのように解釈するかは違ってきますが、時代そのものが採用する思想は、知らず知らずのうちに、あるいは強制的に生活のスタイルを決定します。戦争中であれば、民主主義のイデオロギーは消し飛んでいます。しかし、少なくとも明治・大正時代には民主主義の高揚があったわけで、その当時を生きてきた人にとって、戦争中の状況を幾分冷静に見る事が出来るかもしれません。しかし、生活のスタイルは変化せざるを得ません。同様に、高度成長期時代の採用された価値観、大量生産・大量消費が奨励された時代があれば、不況時代はそうした大量消費よりも質の重視へとシフトしていきました。

いずれにしても、国が採用して奨励している価値観からの影響はかなり強烈であり、また国も国際的な競争や資本の奪い合いや権益の多寡によって潤ったり、貧しくなったりという生き物です。ガバナンス（統治）はそれは我々がどうこうすることが容易ではないし、むしろ自然に作用しているものです。しかし、抵抗が全く出来ない事ではありません。各国のデモ、あるいはクーデターや革命、暴動によって現在の政府が転覆し、全く違う政治が生まれる事は歴史的にもあるいは現在も見ることが出来ます。さらに現代社会について詳しく述べますが、微細に渡って生活スタイルが誘導される事があります。いずれにしても、我々の生活は時代や地域からの影響からは逃れる事は出来ないと思います。しかし、それでも自分自身での生活のスタイルを主体的に選択していく余地は十分にあります。

これまでのまとめとして、まず家族からの影響は個人は受ける。しかし、家族の成員は地域や仕事などの規範や価値観からの影響からは免れない。さらに、地域や仕事あるいは社会は国家からの影響から免れない。そして国家すらも国際的なものや時代的な状況からの影響は免れない。とはいえ、そこには様々な価値観が存在していることを述べてきました。

演習：先ほどのグループになって、皆さんで小さい頃に集団の中で今でも自分の人格形成の一部になっているとかためになった事などを話してもらおう(学校、家族、親戚)。友人の何気ない一言とか親から学んだ事など何でも良い。これは、試験のテーマの一部にもなっていること。話したくない場合は、パスでも良い。ラウンドロビンの手法で。話すことで自分の中で整理されていくこと。1の試験問題を板書する

学校やサークルなどの目的を持った集団に帰属する事

ある一定の時期私たちは、家族や家庭を中心に生活しますが、徐々に幼稚園や保育園に行く、小学校、中学校、高校と組織に属していきます。また、部活やサークルに入る。あるいは、交友の集団も、例えば飲み仲間、職場の仲良しグループ、あるいはあまり好きではないグループなど～これは後でも述べるが、サブグループが周りに広がっています。このような行動範囲の拡大と共に、人は様々なコミュニケーションの取り方を覚えていきます。

先に述べた自然発生的なあるいは、運命的な集団とは違い、これらの組織に帰属する事は、自分の選択のうえに帰属します。まあ、学校関係は自己選択の余地はあまりないかもしれませんが、家族は、生命の維持から自己実現までの安全基地という意味で、トータルなものですが、学校やサークルは、ある一部分、もしくはある目的を遂行するために存在しています。よって、社会一般のイデオロギーなどの大きな影響の他、その組織特有の規範やルールを守るという特殊性があります。もちろん、規範を守るという度合いも意識の持ちようによって違ってきますが、明確なルール違反は、法律などとは別に排斥とか所属する事を中止させら得る結果になります。

いずれにしても、ある一定の規範の中で、期待されるあるいは所属が許可されていきます。この規範

は社会一般の善悪とは関係なく構成員に作用する事があります。例えば、一番分かりやすいのが、学校の校則です。学校の生徒は一般的な法律とは別に、学校独自のルールの遵守が義務づけられています。いまはどうか分かりませんが、私が中学校の時は、ズボンの太さから持ち物までかなり厳格に規制されていて、学校で許されていないものを持ってきた場合は、没収され、返却されなかったものもいくつかありました。普通に考えて、私物を取り上げて良いという法律はありませんし、むしろ犯罪ですが、校則という名の下で正当化される。逆に、傷害にならない程度の、体罰（暴力）や罵詈雑言は先生には許されていて、生徒がそれをする事は認められませんでした。学校は社会の常識を教えることも教育に含まれているとすれば、そうした反社会的なことが容認されるという矛盾も抱えている事になります。（とはいえ、組織を抜けたり、入り直したりする事は可能ですし、組織独特の規範は成員によって変えられる事も可能です。）

これは極端な例ですが、いずれにしろ集団ではそれぞれの性質や場所、あるいはメンバーが違えば一般社会が流布する規範とは違うルールが存在します。とはいえ、やはりそのルールもある一定の大きな社会規範の影響を受ける事をイメージしてほしいと思います。

演習：メイポールの手法を行う。メイポールはあるテーマを決めるときに有効。キャンプでご飯を決める話。
実演：(援助者)好きな食べ物を聞く→答える。別の人に話を振る。
・自分が福祉に興味を持った理由。個人・集団から問わず。(自分のことを話す) 特に思いつかない場合はパス

社会化と再社会化

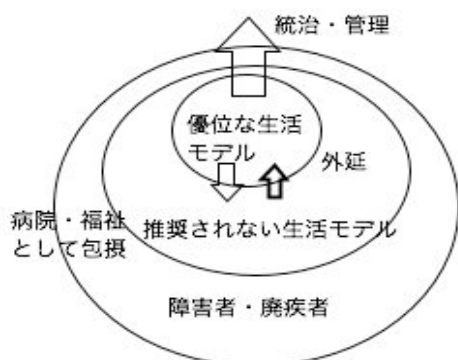
レポート課題では、**社会化と再社会化**について考慮してほしい事を挙げていますが、すでに述べているように、様々な機関や組織あるいは家族からの影響を受け、自分の枠組みを作り、その成員間での生きるために必要なコミュニケーションの方法や振る舞いを学び続けていく事が**社会化**です。そして、環境が変わる事による新たなルールを身体化する事を**再社会化**です。この区別は、**個体の発達過程と共に同一の組織から新しい技能や身につけることは社会化であり、違う環境下でいままでの社会化されたスキルや生活スタイルを再構築することを再社会化と分けた方がすっきりします。**

もちろん、同一の環境においても価値観の変化はあります。教科書では海外に移住したとか農村から地域に移ってきた高齢者が例としてあげられていますが、そこまで分かりやすくなくても、例えば、知的障害者への考え方が措置から契約へ、あるいは理論の変化、療育からノーマライゼーションへ。あるいは、トップが変わる事での経営や仕事のあり方の変化などです。そうした意味で、人は断続的に必要とされる価値や規範を内面化し、適応していっていると言えます。

現代社会について

次に、社会福祉としてどのように社会を見るかであるが、教科書では**自己愛社会**が挙げられている。簡単に言うと、個別化が進み、社会連帯よりも自己実現や個人の自由が尊重されるようになった。そのため、自分中心に考えるようになったとされるものです。しかし、これは、何もそう思っている個人が悪いわけではなく、そうした生活スタイルを許している周りの人々が多数存在しているからといえます。教科書 I、P,170-173では、ライフサイクルの視点で人の人生～集団・社会との関わりで表現されているように映ります。ともすれば、**個体と小集団との関わりに焦点があるように映ります。**しかし、そもそもライフサイクルを提唱したエリクソンは、1960年代のアメリカ社会の諸相から描いたものですし、研究分野で言えばインディアンの通過儀礼から青年から大人になる社会的要因、あるいはアメリカに接収される事でのインディアンの飼育状態による無気力さとは何かを描いたものです（詳しくは、EHエリクソン『乳児期と社会』I、II、みずず書房）。よって、よりマクロな視点（社会の諸相）から個体と発達を阻害する要因を示しています。このことから、**資本主義の弊害→国家→企業→大人→子供（個体）**で捉えることが大切です。そうでなければ、**病理は個体にあり、**

環境も狭い範囲で使われるからです。このように考えると、誰が悪いと言うよりも社会のシステムにおいて孤立化させたり個別化が図られていると考える事が出来る。



さらに、現在は、自己愛社会というよりもみなさんは格差社会、あるいはネット社会、聞いた事があるかと思いますが、下流社会などと言われるようになっていきます。このことについては、以下に述べる社会の規範が社会的排除を生み出す事を中心にお話しします。

規範は、所属する組織に構成員が望ましい行動や振る舞い、あるいは言動を規定します。その一方で、規範を守れない人や現在優位とされる生活モデルを推敲できない人たちを外部へ追いやる。あるいは、そうした外部の存在を作ること、規範を維持しようとする。そうした外部の存在を作ること、規範を維持しようとする。そうした外部の存在を作ること、規範を維持しようとする。そして、排除された人は権利の制限や剥奪が為されます。

この剥奪に関しては、政策誘導などで作られる場合（便宜上、相対的な不利）と歴史的に長い間弱者に置かれて来ている場合（便宜上、絶対的な不利）があります。

相対的な不利についてこれはよく起こりうることです。例えば一昔前までは、家は妻が守り、外では旦那が働いて来るという性別分業が奨励されていました。言い換えると、専業主婦とか良妻賢母とかそうしたイメージが家庭のモデルとしてしばらく定着していました。また一般的な家庭の子ども数は二人としてモデル化されていました。それは政策的にも例えば所得税の減税や扶養控除あるいは保険や年金などで専業主婦に対する手厚い保証がされていました。その一方で、3歳まで子供は家で育てるべきであるといういわゆる「3歳児神話」というものがあり、保育園に預けるのは、3歳以降であることが当たり前になっていた。しかし現在は、共働きの生活スタイルが奨励され、専業主婦への控除や手当が削減されています。そして、共働きであれば控除が受けられるというように、政策誘導されています。そして、現在は0歳児からの保育サービスがかなり充実し、3歳児神話は否定されることが多くなった。これは専業主婦と単独で働く家庭モデルが共働きの家庭モデルへシフトチェンジすることによる前者の排除（あるいは権利の剥奪）といえます。あるいは分かりやすいところでは、一昔まで福祉の仕事はやりがいがあって安定的な仕事だともてはやされていましたし、バブル崩壊後は何もなくても人が集まっていた。しかし、介護報酬の単価切り下げなどの政策誘導等によっていまや人材確保が難しくなっていることなどもその例になるかと思う。

先の述べた格差社会では、負け組と勝ち組と選別し、フリーター、派遣社員がいずれはネットカフェ難民のように社会のつながりが細くされ、漂流していく事が問題視されています。ここに孤立や発言を封じられた非人間的な生活の営みを見る事が出来ます。しかし、これもまた作られた相対的排除の典型です。なぜなら、不況時代には就職難とか企業の理念で、フリーターや派遣社員の生活スタイルがもてはやされた時期がありました。好きなときに好きな仕事をして賃金を得るとか、ちょっと前までは、明るいトーンでCMを流していましたし、論調として、派遣社員を積極的に使う事が良い経営だとメディアでも肯定的に流していました。そして、当の派遣を行っていた人たちも不況時代、失業者があふれていたときには、それで良かったのかもしれない。しかし、現在は新規雇用も前よりはされるようになって、新規採用との格差、低賃金の状態が固定化してきて、貧困がクローズアップされるようになりました。そしていま、イデオロギー的にも変化が見えてきています。このことについて述べても長くなるので省略しますが、いずれにしても、生活スタイルは短い間でもドラマティックに変化し、何が正しいのかとか善いのかという判断はつきにくいという事を押さえてほしいと思います。

固定的排除についてこれは昔から変わらない排他的な位置に置かれる人達を指しています。

異論はあるかと思いますが、現在も病人や障害者は絶対的排除の位置にあります。あえて単純化してお話すると、これは小泉義之という哲学者が語っていますが、

- 1.病人は社会において生産できないが故に常識的社会にとって逆機能である。
- 2.とはいえ、病人は回復すればまた生産が行えるが故に治療は社会にとって有意である。
- 3.しかし、治る見込みのない病人は生産の見込みがないが故に常識的社会において逆機能である。

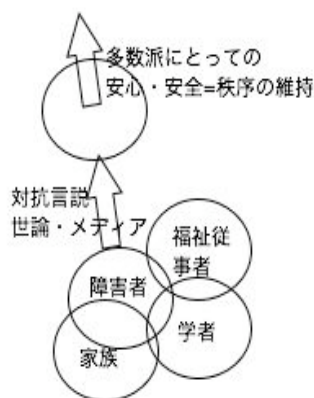
続けて、社会は、病人を社会の外部に放逐する。しかし、社会は、放逐された病人が、そのままの姿で集团的に社会に立ち現れるのをおそれる。だから、社会は病人を患者として個別的に専門家と親密権の支配下に組み込む。決定不可能なゾーンのただ中で快復の希望を通して、患者役割を担わせる。その犠牲の構造が侵入する」とする。障害者特に精神障害や知的障害を理性がない存在、あるいは秩序を揺るがすものとして、社会の外部に引きつけています。その証拠に、施設や就労の機会の制限、あるいは障害者として規定し、医療機関や福祉の領域に置きつけています。そして、もっともおそれるのが、働かなくても障害があっても、ただそれだけで生きていけること、何もしなくても生きていけることを容認することです。それは、勤労あるいは労働によって富が生産されるという統治あるいは秩序維持にとって驚異なのです。労働と秩序についても話せば長くなるので省略しますが、やはり障害者と健常者あるいは働ける人とそうでない人などの選別と排除が存在していると言える。



これは、一つのたとえだが、現在障害者福祉特に障害者自立支援法では、施設入所よりも居宅や地域サービスへのシフトが為されている。これは、予算の面からも家族が一生かけて扶養してもらった方が、コストが安いためである。そのため、家族で自分の子供(20歳を超えても)を介護することは美しいとか、安易に施設に預ける親への無言のプレッシャーが紡がれている。

そして家族が子供を介護し続ける、あるいは福祉という枠組みの中で生活させることで、安定という名で管理させる。これが包摂という事になる。

いずれにしろ、目に見えないあるいは大きな声で語られないけれど、その時代、あるいは社会において望ましい生活スタイルがあり、それは「~こうあらねばならない」「~こうしないといけない」という規範が働いている。つまり「**支配的な言説**」(ドミナントストーリー)と呼ばれるものです。



確かに現代が望ましい生活スタイルなどがあっても、それでも我々は、自分の手の届く範囲で自分の生き方を決めることが出来るという自分自身の自律性があるからです。例えば、現在、フリーターやネットカフェ難民と呼ばれる人達はアンダーグラウンドであり、下流社会を形成している。そして、それぞれが孤立し、社会とのつながりが希薄な状態(権利の剥奪)がされている。しかし、そうした存在であっても、集団となり、訴え、メディアを使い、学者を動かし、自らの存在~生きる権利と生活の保障に対しての運動を行っています。そうした活動を通して、現在、いくらかの政府や政策での改善あるいは労働搾取の状態の改善が図られようとしています。

身近な例では、介護従事者が団体を組み、運動を起こし、メディアや学者を動員し、シンポジウムなどでそれまで孤立して状況が分からなかった人たちの目を開かせ、今後どうなるか分からないが、

政治を動かしている。

社会福祉がよりどころにするべきは、そうした声なき声あるいはいったん社会的に排除されている人達が生きていけるように対抗するあるいは生活の保障を促す立場にあるということです（オルタナティブストーリー：対抗言説）。確かに支配的な言説は強固ですが、少なくとも日本においては民主主義が謳われています。民主主義には一方でメディアなどの情報を操作し、個人の自由の尊重という名の下で団結を阻止し、権利を剥奪するという面もありますが、素朴に、対等に、いたいことを言い、話し合いを通して自らの生存権を勝ち取るという意味があります。

なぜ見も知らない他者に対してケアをするのか。それが社会を支えることに言及。

アメリカのソーシャルワーカー倫理綱領では、理念に社会的正義が挙げられています。支配的な言説から排他されている人達の不当を訴え、改善していく。そしていつしか、それが価値観として形成され、一つの生活スタイルとして認知される。つまり、さまざまな社会からの影響を受けながらも、自らの生き方を選び直し、それが新しいスタイルとして社会に発信される。それは一般的に望ましいと思われていないことかもしれないけれど、そうした生き方も悪くないと思うこと。様々な生活のスタイルが互いに牽制しあいながらも共存する（別様の世界のあり方の提示）。そうした柔軟な視点に立つことが福祉に従事する人には求められていると思います。なぜなら、これも異論はあるかと思いますが、福祉は、いつの時代も一般的にはアンダーグラウンドな立場に置かれている人たちと共に寄り添い、そして生きていこうとする人たちなのですから。ただ、例えば先進的な実践をしているNPO法人の思想などに安易に迎合し、ただ国家や現状を批判してはいけません。安易な答えやユートピアを描くのではなく、批判を力に現実的な意味で、構想すること。それは小さな意識変革であっても周りに浸透していくことである。現状に甘んじない良い暮らしへの視点→行動を生むそれは、現実の見方をずらす。それが知識の力であり、エンパワメントである。

演習：では、皆さんで現在福祉を学んでいるわけですが、学んでいる中で何が福祉では何が大切か話し合ってみてほしい。これも試験に密接に結びついている課題の一つ。
この場合、資料の後ろにあるメイボールの手法で行う。
（援助者を指定）援助者は、あなたにとって何が大切ですかなどと呼びかける。呼びかけられた相手は、私は〇〇ですと答える（その理由も簡単に話してもらえばなお良い）援助者は礼などを言って、次に別の人に同様の問いかけをする。答えたくない場合はパスでも結構。

おすすめ書籍

渋谷望（2003）『魂の労働』青土社～ちょうど小泉改革のあたりで席卷したイデオロギー～新自由主義、ネオコン、ニューライトがいかに労働を搾取していたのかについて分析し、なおかつ、それから脱して生きるとは何かについて述べています。労働搾取を考える手がかりとして、介護労働を取り上げています。家事労働を有償労働に転換する際、労働の意味をやりがいとか貴い仕事としながらも、いままで家事労働は無償で行っていたのだから、有償労働たる介護労働は低賃金でよいとする政策誘導について述べています。

もう一つが、小泉義之（2006）『「負け組」の哲学』人文書院～この哲学者は、かなり過激ですが、まっとうすぎて過激なんだと思います。障害者や老人を無能力者として外部に置くとは何か。あるいは、負け組とは何かについて気持ちが良いぐらいに論じています。同じ作者で、小泉義之（2006）『病いの哲学』ちくま新書などもありますが、こちらは若干難しい内容となっています。

グループの発展について

次に、少し視点を変えまして、各論のような事をお話ししていきます。先に少し述べましたが、集団は自分の身の回りにたくさんあります。家族なども集団ですが、これから話す事は、集団に身を置いていれば少なからず体感するであろう、集団の持つ力による個人の成長についてです。

皆さんの中で学校のクラス対抗の行事とか運動会の練習、あるいは部活（運動・文化）問わず、集団で何かを行うとき集団に属していて、励まし合ったり、助け合ったりして何かを成し遂げた事があるかと思います。そのときの昂揚感とか充実感を体感した事があるかと思います。あるいは逆に、集団であるが故の残酷な仕打ち、例えばいじめとかけんかとかでいやな思いをして心が傷ついた事があるかと思います。

この集団の力についてその発達的な段階について述べていきたいと思っています。なお、このことはグループワークと密接に関連しています。ここでは一般的なグループの発達過程を説明し、そこに何かがあるのか。そして、グループワークにとってグループの持つ力のどのような要素を必要とするのかを概説します。教科書の I PP.174-176にそのことが書いてありますが、グループそのものの発達と言うよりもグループワーク行っている上での発達となっており、イメージがつきにくい所があります。よって、他の文献と併せて簡単にまとめます。皆さんにお渡ししているグループの発達過程の表を元に説明します。(グループの発達過程を意識化する事)

参加と初期

どんな出来事や構造がグループを誕生させるにせよ、グループメンバーが集められ、グループが形成されたとしよう。初期の段階での行動はだれもが類似のまたは共通の要求を探しているように振舞い、初めは儀礼的でまた表面的である。導入（紹介）が行われている間、各々の人は他のメンバーが述べたことをもとにして自分のものと一致しているかどうかを調べていく。そして、異なったスタイルと欲求に出合って混乱と不安が明らかになる。最初の各人の目標は相互作用のための安全なパターンを作り上げることである。つまりそこでのグループの問題はメンバーシップに関する基本的な基準の確立である。

対人的間の問題として、各人は内包の強さのレベルを変化させながら仕事をするようになる。この段階では幾つかの問いが起き上がる。「私はここでこれらの人たちと一緒にいたいのか（内包されたいのか）？彼らは私を私として受け入れて（内包して）くれるのだろうか？それにはどのくらいの代償があるのか？私は喜んでそれを支払うだろうか？」

グループの中に存在するスタイルとか欲求における類似性に従って、またグループの中に存在する曖昧さに対する耐性に従って、この最初のステージはスムーズになったりまた心地よくなったり、あるいは緊張が高まったりまたフラストレーションが生じたりする。

権力と統制

メンバーの期待が共通のレベルに発達すると、次のよりダイナミックな段階に移行する。個人内においてもグループ内においても耐えるには最も難しい発達のステージであるが、このステージは避けられないのである。それは勢力と意思決定を扱う重要なステージである。

この段階では、期待と類似性の基礎的なレベルが確立した後、個人は自分らしさや勢力、影響力を再び獲得するために各メンバーの差異に挑戦し始める。

メンバーは通常自分の精一杯の情動の中で、必要と認知した課題に反応し始める。グループの課題とか構造がどのくらいハッキリしているかに関わらず、グループ内にリーダーが出現するときと同様に、グループメンバーは反応し、リーダーに対して攻撃をするだろう。勢力と影響力に関するこれらの努力は直接的な攻撃の形をとるか、もしくは目に見えない非支持の形をとるかも知れない。対人的問題の次元では、メンバーは十分なコントロール内にいるためにまた方向を明確にするために、彼ら自身の統制欲求を通して活動している。

グループメンバーがグループ内の意思決定において受容的な手順／プロセスを生み出す試みをたゆまなくやり続けることで、彼らは自分達を次のステージへ導くことになる。このステージで得られた

活動力とスキルはグループが進展する際の本質的なものである。グループがこのステージの不快さから逃れようとするなら、それは失敗体験を生み出すだろうし、そのプロセスが遂行されて勢力の問題がはっきりするまではステージはとどまる。そこには意思決定の機構が含まれている。グループがこのステージで何がなされたかに気づけば気づく程、将来のグループの発達により早くなる。

親密さと分化

最初の二つのステージの欲求不満を経て、ついにグループは単なる個人の集合体としてではなく本當のグループとして共に存在できるようになる。ここでは課題を達成するために役割とプロセスを相談し始めるようになり、グループは凝集力（凝集力については後で述べます）を持ったユニットになる。そして、違いが存在するにもかかわらず、機能的な関係が探求され確立されるようになる。グループは協同的に活動しながら、目標を捉えるための準備状態にある。いくつかの目標を達成したことで、成功に貢献したりそれを妨害したりする要因に関する洞察を得たり分け合ったりする。

対人的問題の次元では、メンバーは以前よりは表面的ではないより深いレベルで他者へのケアリングと愛情を持つようとする。有意義な機能的関係がメンバー間で発達する。リーダーシップの問題は相互依存的な行動もしくは他者と共に活動することにより解決される。課題はグループ内でのユニークな能力を認めることにより達成される。すなわち、適切でだれもが認めるところへ導かれそして生産性と必要性をもたらすところへ達する。この相互作用が起こると、信頼が生まれることになる。

うまく合意に達したとかグループの問題を解決できたといった成功体験は、力強い斉一性への力を生み出すことになる。強さと欠点との全てを合わせ持ったグループの独自性の感覚である“グループらしさ”を意識するようになる。そこで、そのグループは私たちのグループとしてのアイデンティティを持つようになり、そのアイデンティティは多くの他のグループと同じように同じサイクルによって発展してきているので、低下しない。分化とは、グループの目的に従って、各メンバーが機能に分かれて役割を果たす事を指します。

終結と移行

教科書では、ここで終わっていますが、グループの発達過程の最後は終結期と呼ばれるものがあります。

グループの目的が達成されるか、もしくはグループのための時間が終わるとグループは変容することに直面する。変容は二つの道のうち一つをとることになる。

再定義、つまり新しい目的および（あるいは）構造を確立するか、もしくは、解散、終結または死ぬかである。グループは将来を決めなければならないか、もしくは欲求不満と不充足感の伴う道を歩まなければならないかのどちらかである。うまく達成した多くのグループの自然な傾向は将来も同じ形態で共にいようとする事である。苦しかったこと楽しかったことのすべてをとらない、その意味と洞察を共にわかち合った体験はグループのメンバーを強く結び付けている。そこで学んだことを育てることができるならば、その精神とか体験は生き続けるだろう。

こうした集団の発達過程には、それを束ねる援助者あるいは主催者の力量などが必要です。例えば、初期の段階では、それがどのような意図で集められたのか。そしてどのような目的を達成するべきなのかがはっきりしている事。あるいは、それを導く呼びかけと結束を促す取り組みなどです。こうした事は、次のグループワークの展開過程で詳しく述べていきますが、こうして述べていきますと、思い当たる事があるのではないのでしょうか。

小学校・中学校・高校などで入学式の後にクラスに入ったとき、仲間が出来るだろうか。出来ないだろうか。どう振る舞ったらよいのかという不安やおそれ。慣れてくると、仲良しグループが出来たり、価値観が違うグループとの衝突。先生やリーダー的な集団への反抗、自己主張するための足場作

り、友人との葛藤などが生起していきます。

とはいえ、仲良しグループも流動的であり、時には敵対というか馬が合わないと思われるグループであっても、何かの共同作業を通して理解し合ったり、初期の段階では得られなかった共感や価値観の相違の中でも融和が図られたりします。行事や何かの発表会、あるいは大会などでの一致団結というものはあるかと思います。そして、行事が終わったときあるいはクラス替え、卒業などは、一つの総括として、それぞれの個人の体験や経験となり、個人の発達に大きく寄与するのではないのでしょうか。

治療教育力について

グループの発達過程の中で、特に中期から後期にかけてのグループと個人、あるいは個人同士に作用する集団力学～グループダイナミックの要素の中で、治療教育的な力が個人の発達に大きく寄与すると考えています。

この治療教育的な力とは、教科書の1P.220-222に詳しく書かれていますが、グループが個人にとって肯定的に働くことによって、生まれる力をまとめて表現しています。言い直すと、例えば教科書に書かれている、情報・事実の分かち合いが出来る力や同じ運命共同体出ると生まれる力などなどによって、グループに帰属する事によって自分のアイデンティティ（価値）が認められるとか、行動の吟味や修正をする力が個人に働く事で、その集団の成員としての学習をして新しい見方や生活の適応能力が身につくなどを総称しているといえます。

治療教育力が働かず、集団のダイナミックさが、成員の排除や悪い価値観や集団の縛りがきつすぎて、個人の心理や精神を傷つける事があります。これは、これまでのレポートを添削して誤解している人がいるのですが、治療教育的な力がそうした逆作用を持っているとする記載がありました。しかし、治療教育的な力が逆作用を持っているのではなく、グループの持つダイナミックな作用の中に逆作用があるのです。

あくまでも治療教育的な力は肯定的な集団のダイナミズムの総称である事を押さえてほしいと思います。

グループワークの特色

次に、グループワークとは何かについて述べていきます。すでにケースワークとの違いで話しておりますので、若干の考察を加えていきます。このことを説明するには、歴史からはいたり、理論モデルの紹介などを通してグループワークとは何かを説明する方法もありますが、本スクーリングでは、それを省略しまして、現在、グループワークはどのように用いられているのかを中心に説明します。つまり、グループワークの実際について説明する中で、イメージを作してほしいと思います。レポートもそのような視点で課題を提出しております。

グループワークの特色について取り上げますが、このことについては、教科書 I のP.178にまとめがあるので、若干の説明を加えていきたいと思います。

グループワークの定義について

レポートの課題では定義について触れるように指示をしておりますので、このことについて若干お話しをします。ニューステッター、コノプカは代表的な理論家です。ニューステッターに関しては、教科書 I P.91の下段の方に、「集団援助技術とは自発的なグループ参加を通して、個人の成長と社会的適応を図る教育的過程である」と定義しています。コノプカは、P.98の中盤あたりに、「個人の社会的に機能する力を高め、また、個人、集団、地域社会の諸問題により効果的に対処しようよう人々を援助する」としています。

ニューステッターが、個人の主体的参加により、自分自身の成長をグループワークと見なしていたのに比べ、コノプカは援助者が用いる技法であり、さらに生活対処能力を集団や地域に広げたという違いがあります。これは時代的な背景もあります。ニューステッターは素朴なセツルメント運動を参考に、有識者が貧しい人や差別を受けている人たちを集め、教育的な施しやレクレーションを通して対象者がいくらかでも自分たちの生活への知識を身につけていったと背景があります。コノプカは、第二次世界大戦の集団もつ狂気力などからの反省点に立ち、なぜ集団の力を使うのか、そして、それはどのような価値観で行うのかを問わずにはいられなかったと言えます。

この価値観については、福田垂穂（たりほ）は「ソーシャルグループワークとは、民主社会の原理と、目標の枠組みの中で、個人と社会がそのニーズを充足し、かつ調和的な発展と、価値基準の不断の拡充を遂げるために、集団と集団の持つ相互作用を、意識的に活用するグループワーカーの援助と指導の下に、社会福祉の専門的な場において、プログラムを通じて行使される方法論の一つであり、また過程である。」と、民主主義を基調に置いた個人の生きる力を身につける事としています。

配布した前田ケイ先生の論文を開いて、論文のP.17の3ソーシャルグループワーク方法の特色という項目があるが、1)と4)の下線部を引いてもらう。

レポートでは、どの定義を挙げてもかまいませんが、全部挙げたり、ただ定義を挙げるだけでは、意味がありません。その定義がどのような意味を持っているのかを自分で改めて解釈してみるという事です。いずれにしろ、これらの定義から読み取れる事は、個人の主体性や個人のニーズを充足する、あるいは課題を解決したり、社会生活上の能力の向上を目的にしたのが、ソーシャルグループワークと言えます。それはケースワークも同じですが、グループワークは、先にも触れましたが、グループを意図的に利用する事、グループを目的意識的に使う事であるといえます。

なお、少し補足しておきますが、ケースワークとグループワークは両輪のようにあるということです。グループワーク～利用者間の相互援助体制を利用する方法とケースワークとしての個別へのアプローチが組み合わされることで、個人のニーズがより充足されると言えます。例えば、グループに入り込めない、あるいは排除された、またはグループワークとして参加したけど、個人が抱える問題が、きわめて個人的なことであり、グループとして解決できるような事でない事が分かったなどの場合、援助者は一人一人に対しての解決策を一緒になって見出していけないといけません。つまり、ケースバイケースでグループワークとケースワークを使い分ける柔軟さが必要といえます。

グループワークの分類

教科書では理論モデルを中心にグループワークの類型を行っていますが（教科書Ⅰ：177）、本スクーリングでは、その理論モデルによる分類よりも、どちらかといえば、PP218-219のグループの種類による分類を取り上げます。その方が、イメージが付きやすいからです。

言い換えると、具体的なグループの特徴と援助者が取る役割について簡単に概説します。この分類では、大きく二つに分けられ、**治療グループ**と**課題グループ**に分かれます。その中から、今回は治療グループについて説明をします。

その前に簡単に治療グループと課題グループの違いについて説明しておきます。資料の方に、おおざっぱにまとめているので、見ていただきたいと思います。治療グループは詳しく説明しますので、省略しますが、課題グループは組織的な問題への解決策を見出したり、新たな考えを生み出したり、あるいは何らかの意志決定を組織として行うのに用いられます。基本的には、クライアントのニーズに応える事、組織のニーズに応える事、コミュニティのニーズに応える事が原則になります。治療グループはどちらかといえば個人のニーズの充足を目指すのに対し、課題グループはまずもって組織としてのあり方を話し合いの中で決めていき、結果として個人のニーズを充足することがあるかもしれないというものです。課題グループとしては例えば、学際的なチームワークや組織での異なった職種による議論などが当てはまるかと思えます。また、グループワークとして挙げる課題によって、同じ

ような対象者でも、違うものとなります。

例えば、私が以前に勤務していた救護施設では、利用者の人たちが自治会を持っていました。その中では、施設の中でもっと職員によりサービスをしてもらうには具体的にはどのような事を要求するべきかという話し合いを月例で行っていました。そこには、一人援助者も入るのですが、司会・進行は利用者さんでした。これは、どちらかといえば、課題グループといえます（とはいえ、その頃は明確にグループワークを意識はしていませんでしたが）。つまり、一つのテーマが組織（施設）へのサービス改善であり、意見集約と具体的提案について話されていたからです。しかし、治療グループとしてもよりよいサービスの模索は出来ます。例えば、一人一人の施設生活での困難性などを話し合い、共有し合い、利用者自身が自分が抑圧されているとか、もっとこういう暮らしが出来るはずという気づきを促す方法を採用すれば、治療グループとしてのグループワークとなっていきます。

治療グループの分類

皆さんに渡しているグループの分類は、あくまでもある特徴を示しているに過ぎず、グループワークでは、複数の要素を含みながら運用される傾向にあります。例えば、サポートと成長の要素が複合的に行われるとか、教育と治療が複合で行われる等です。

往々にして、福祉は施設とか福祉サービスを受けている人を対象にしているという印象が強いが、ここでは福祉に携わろうとしている人、あるいは福祉教育の一環として体験している普通の人も含められている。

教科書では、モデルとして、例えば相互作用、治療、社会目標、あるいは生態学的アプローチが挙げられています。(IPP.177-178)このことにも若干触れますが、一番分かりやすいのは、いかに挙げるグループの特色からどのように援助するのかという実際的な分類だと思います。

サポート

基本的目標として個々のメンバーとグループに対して支持的な介入を用いることに特徴がある。支持的な介入を通して、メンバーがストレスの多い生活上の課題に対処できるように援助したり、メンバーが抱える課題への対処能力を高めることが出来るように援助し、今後、起こるかもしれないストレスに富んだ出来事に適応できたり対処したり出来るようになることを目指している。

例えば、

- 1.両親の離婚によってどのような影響下について話し合う子ども(学童のグループ)
- 2.癌と診断された人とその家族が、病気の影響とそれへの対応の方法を話し合うグループ等。

など個人が抱えている孤立や疎外感からの開放、将来への希望が持てるように促し、メンバーが自助と相互の支え合いを通じて困難に対処する技能を高める。時には、ピアカウンセリングなどのようなメンバー同士での支え合い等が促される。

教育

教育の一番の目的は、メンバーが新しい情報や技能を学習できるように援助すること。実施される期間は、例えば治療機関、学校、高齢者施設、矯正施設、病院などです。

内容として例えば、

- 1.児童福祉機関によって行われる里親予定者への教育グループ
- 2.被雇用者援助プログラムを行うために、ソーシャルワークによって作られた職場適応のためのグループ等です。

中には、教訓や技能習得の他、社会的経験による学習に焦点を当てる場合もあります。あるいは、話し合いの中から個人的な楽しみや自分を豊かにするための学習に対する関心を把握した上で、むしろ、メンバーを引きつけるようなアプローチを用いる場合がある。(みんなでやってみましょうと)

成長

メンバーが自分たち自身と他者に対する考え、感情などの気づきを深めたり、変えていく機会を提供することを目指している。このグループは社会・心理的に何らかの違和感を感じていることから回復するというよりも、**社会・心理的な健康をさらに増進させる**ことに焦点が当てられる。

1. 青少年のために彼らが持っている自尊感情を高める
2. コミュニティセンターなどで行われる女性のための意識啓発グループ

一般的に、自己を変革したり、人間としての潜在能力を発揮できるようになることを重視している。その上で、グループにおけるコミュニケーションは、メンバーを中心としたもので、非常に相互的である。

治療

こちらは成長と違い、**社会・心理的な違和感や外傷からの回復をグループ体験を通して援助**することを目指している。治療グループは主にメンバーに対する治療と回復に焦点を置くことによって、単純なサポートグループとは区別される。この治療は、特に医学的な要素が強く、特別な意味合いを持っている。病気や機能不全の人々を健康に戻すという治療や処遇を重視している。グループリーダーは専門家で、権威ある存在として位置付けられ、メンバーを変える主体として見られる。

入念なアセスメントとワーカーの援助によって処遇目標の実現に向かってグループが展開される。そして、メンバー自身が問題に取り組むことが期待される。

例えば、

1. 地域精神保健福祉センターの外来患者のための集団精神療法
2. 煙草を止めたいと思っている人のための民間の治療期間でのグループ
3. 保護観察施設で行われる青少年プログラムでのグループ

社会化

メンバーが**社会的な技能を学習し、対人的な技能を改善していく**ことが期待される。あるいはコミュニティの中で自分の役割を発揮できるようになることを目指す。グループの特徴として、話し合いの中で目標が定められ、活動を通して行われる。

例えば

1. 一人親過程の親のグループ。これらのグループではピクニックなどのレクリエーション、その他の社会的な活動などを実施される。
2. 精神保健福祉センターでの外来患者のソーシャルクラブ

社会化を目指すグループのリーダーシップは直接的、又間接的に発揮され、グループのメンバーの能力やプログラム活動によってリーダーシップは影響を受ける。そして個の社会化を目指すグループのタイプは3つ有り、

1. **自己主張訓練グループ**～気弱だったり心身の衰えを感じている人とかが心理劇やロールプレイを通して自己表現を変えたり、問題対処力を改善する具体的なスキルの習得を目指す。
2. **施設適応グループ**は、高齢者施設とか精神病院などで見ることが出来る。施設に適応が目的ではあるが、メンバーが自分の考えを主張したり、メンバー間の葛藤を解決するなど、自分の生活技能のパワーアップを図りながら行われる。
3. **レクリエーショングループ**～レクリエーションを通じた社会生活技能の向上という意味で捉えると良い。レクリエーションを通じたグループの所属意識の高揚により、コミュニケーションの向上である。つまり手段としてのレクリエーションといえる。

レポート作成について

構成のバランスについて、グループの発達と個体の成長について学習しながら、現代の諸相から個体の成長が集団の中からいかにむずかしいかを述べてください。

グループの発達をコンパクトにまとめて、グループワークの定義を挙げて、自分なりに考察してください。その上で、援助者が治療教育力を利用して、グループの発達を利用する事。個別なニーズを満たすためにグループワークを援用する事を考察してください。

歴史や各グループワークの理論モデルなどは、紙幅の都合上、割愛した方が無難です。あと、書き出しで、集団とか自己の発達をたくさん書きすぎて、後半のグループの発達過程や治療教育力と援助者の関係などが希薄になりがちになるのでバランスを工夫してください。

もっとも、私が勉強してほしいのは、改めて自分の身の回りにある集団を意識してほしい事。そして、グループの中で発達している事をグループの発達過程と共に自分に置き換えて追体験してほしいこと。そして、グループワークが活動そのものというよりも方法であり、ツール（道具）であること。その明確化です。